

あの音が聞こえる

『幻の光』（是枝裕和監督、一九九五年）において鈴の音と係わり合う何かと誰か

下山田周平

1 謎

『幻の光』には郁夫とゆみ子という登場人物が出てくる^①。郁夫はゆみ子という伴侶と産まれてまもない息子勇一の三人で尼崎に暮らしている。ある日のこと郁夫は自転車置きに家に帰ってくる。ゆみ子とたわいのない会話を交わしたあと郁夫はすぐさま家を後にする。手をふって見送るゆみ子、いちどもふり返ることなく家の通りを歩いてゆく郁夫。郁夫の後ろ姿が遠退きながら、ちりん、ちりん、と音が聞こえてくる。鈴の音。郁夫がいつも持ち歩いている自転車の鍵には鈴が紐で結ばれてい

た。この日の夜、雨が降りしきるなか、ゆみ子のもとに警察官が訪ねてくる。「ご主人はいてはりますか」「まだ帰てきませんねん」「そうですか、いや、実は電車で轢かれた男がいますねん、確かめてもらいまへんか」。ゆみ子はバトカーに乗り込み、警察署の一室へたどり着く。部屋には警部らしき男が一人、白い包と靴が片足だけ机の上に置いてあった。男は白い包を開く。自転車の鍵。「どうですやろ」「うちの人どこにいますの」「見てもわかりませんわ、これでもまだはっきりとおたくのご主人やと確認できたわけではないんです」。身元確認ができないほど遺体は激しい損傷を受けているようだ。「おたくの

ご主人やと確認できたわけではない」といわれるが、遺留品として提示された自転車の鍵は間違いなく郁夫のものであった。

鍵には鈴が結ばれていた。「現場は阪神の杭瀬と大物の間で、電車の運転手の話やと、線路の真ん中を進行方向にむかって歩いていったそうです、ちょうどそこはゆるいカーブになってましてなあ、人が見えたときにはもう間に合わへん距離やったように思います、警笛にも急ブレーキの音にも振り返らんと、まっすぐ歩いていったそうです」。線路の上を歩いていた郁夫は警笛や急ブレーキの音にもふり返らずに後ろから電車で轢かれたようだ。この日のあと、ゆみ子の母はいう、「こんなちっちゃい子を残して、郁夫はなんで死にはったんやろお、ううんってあんたあ、ほんまになんにも氣いつけへんかったんか、子供産まれて三ヶ月ゆうたら男がいったばん張り切る時期やないか、なんの理由もないって、なんや、ほんま謎かけられたみたいやな、いまさらしいてもしょうがないか」と。郁夫の死後、ゆみ子は息子の勇一とともに能登へと移り住み、そこで一人娘友子を迎えた民雄という男と再婚する。映画終盤、能登の海辺でゆみ子と民雄は言葉を交わす。「うちなあ、うち、わからへんねん、あのひとがなんで自殺したんか、なんで線路の上歩いてたんか、それ考えはじめると、もうあかんようになるんねん、なあ、あんたはなんでやと思う」。民雄は自身の父から伝えた話を

する。「海に誘われるいうとった、オヤジ、まえば船に乗ってたんや、一人で海の上におったら、沖の方にきれいな光が見えるんやと、ちらちらちらら光って、俺を誘うんじやいうとった、誰にでもそういうことあるんちゃうか」。その後ゆみ子は能登で静かな生活を送る。そしてこの映画は幕を閉じる。

郁夫は死んだ、それも「なんの理由も」なく死んだと語られていた。身内にとって郁夫の死はつまるところ「謎」である。観客にとっても「謎」である。郁夫の口から自殺をほのめかす言葉が出ることはなく、作中、郁夫の死が自殺なのかそれとも事故なのかなにひとつはっきりしない。たとえゆみ子が郁夫の死を「自殺」だと述べていても、どのようなプロセスを経てそう断定したのか観客にはなにもわからない。実のところはっきりしないのは死の状況でもある。電車で郁夫が轢かれたという現場の状況はあくまでも伝聞で語られたものでしかないし、郁夫が電車で轢かれる瞬間の映像が画面に映ることはないからだ。結局、郁夫の死は語られるものの、なぜ郁夫は死んだのかどのように郁夫は電車で轢かれたのか、確かなことはゆみ子にも観客にもまるでわからない。

とはいえ民雄の話を軸に郁夫の死についての仮説を立てることはできる。「一人で海の上に」と「海」の「沖の方」に「きれいな光」が見えるようで、この光はおそらく海面で「ち

らちら」光っている。「海に誘われる」こと、つまり「ちらちら」光る「きれいな光」に「誘われる」ことは「誰にでも」あると語られている以上、郁夫ももれなくそのうちの一人であり、この光に誘われた可能性がある。郁夫は線路の上を歩いていて、電車の警笛にも急ブレーキの音にも「ふり返ら」ないで「まっすぐ」歩いていったという状況から、郁夫の前方に「ちらちら」光る「きれいな光」があると推察され、この光に「誘」われるさなか、ちりん、ちりん、と鈴の音を鳴らしながら歩いてきた郁夫は後方から迫りくる電車で轢かれた、と仮説を立てることはできる。もちろんあくまでも仮説であってこの状況が確認できるシーンは作中に見当たらず、当然この仮説は検証できるものではない。唯一確かなことは郁夫が死んだということだけだ。郁夫は死んだ。しかしこの断言は正確ではない。留保が必要である。郁夫は死んだ、物語においては、と。「物語において」という留保なしで「郁夫は死んだ」と語ることで見逃されてしまうことがある。郁夫は映画の登場人物の一人であるということだ。映画の登場人物すなわち画面に映る像に生や死といった現象は起こりえない。ゆみ子に見送られながら家の通りを歩いてゆくシーンを境に郁夫は一度たりとも画面に映らなくなる。映像において郁夫は画面から消えた、対して、物語において郁夫は死んだ。画面から消えて、そして、死んだと語られたあと、

それでも郁夫はこの映画に顔を出す、音として。

2 生きている合図

ゆみ子と郁夫が住んでいた部屋の隣にはおじいさんが住んでいる。おじいさんといっても、どんな見かけをしているのかわからない。なぜならこの人物は一度たりとも画面に映ることがないからだ。どのようにしてこの人物がこの映画に出るかという音によってである。映画序盤、ラジオの音が画面外から聞こえるなか、居間で郁夫がくつろいでいる。「なにしとったん」と銭湯帰りのゆみ子が郁夫に話しかける。「隣のラジオ聞いてとった」「ちょっと音、大きいなあ、うち、ゆうてこよか」「ええやん、年取ったら耳遠なって、あれくらいがちょうどええんやろ、ここで聞けるし」。画面外から聞こえてくるラジオの音は二人の住む部屋の隣から聞こえてくるもので、隣にはおじいさんが住んでいるようだ。ラジオの音に加えて笑い声と手を叩く音がある。二人はおじいさんの笑い声と手を叩く音のした方へふり向く。誰もいない方向へと振り向く二人。二人の視線の先には壁しかない。画面に映りはしないが、画面の外つまり壁の向こう側におじいさんはいる。郁夫の死後、尼崎の家を訪ねてきたゆみ子の母は隣の部屋から聞こえてくるラジオ

の音があまりにもうるさいことに驚く。笑い声や手を叩く音は聞こえない、大音量のラジオの音だけが聞こえる。「ひとり暮らしのおじいさんだから、生きてる合図みたいなもんやて、あの人がいうとった」とゆみ子はいう。「あの人」とは郁夫のこと、**「生きている合図」**とはおじいさんの部屋からラジオの音が聞こえてくることだ。おじいさんの笑い声や手を叩く音も**「生きている合図」**といえる。

「生きている合図」はおじいさんの気配と生存を喚起する。この映画においておじいさんという存在の核は音である。月日が経つにつれて**「生きている合図」**はだんだんと鳴りをひそめつていにはなにも聞こえなくなる。なにも聞こえなくなってからのおじいさんのその後は一切不明。おじいさんはそのすべてが**「生きている合図」**で構成された存在であるため、その音がしなくなれば画面外のどこかにいることもどこかで**「生きている」**こともできない。ただしおじいさんはこの映画に存在したという痕跡を視覚的に残す。ゆみ子の息子は大きな飴玉を持って部屋へやってくる。「おばあちゃん、飴玉もろた」「だれにもろた」「隣のおじいちゃん」。「ちゃんとお礼いえたか」。息子はおじいさんの部屋の入り口まで行って**「ありがとう」**という。そのときおじいさんの声が聞こえてくることはないし姿も映ることはない。**「生きている合図」**がしなくなったとしても、飴

玉はおじいさんという人物がこの映画にいたことを画面上で確認できる唯一の痕跡である。勇一は飴玉を口に運ぶ。飴玉がすべてなめられてしまったときこの映画におじいさんがいたという痕跡は完全に消える。

おじいさんは飴玉を残して画面から消える、対して、郁夫は自転車とその鍵を残して画面から消える。物を残して消えることは同じなのだが、郁夫は家族を残して死んだ者であるため残した物は形見と呼ばれる。違いはそれだけではない。音が鳴るものかどうかである。自転車の鍵には鈴が結ばれていた。この鈴はゆみ子がつけたものだ。自転車の鍵に鈴が結ばれてからというものの、郁夫が自転車に乗っているときには必ず鈴の音がする。自転車に乗っていないときでも郁夫は鍵を持ち歩いているため、歩くと鈴の音がする。郁夫が移動することで音量や音色が変化することもあればそれは関係なく同じ調子で鳴り続けたりもする。ちりん。この音はこの映画のなかで何かの音というよりは誰かの音だ。鈴の音は郁夫の気配と生存、正確には、郁夫がどこかへ移動していることを喚起する。アパートの一室、玄関ドア越しにゆみ子は少し身を屈めてじっとしている。ドアの上部にはすりガラスが小さく空いていて、そこにゆみ子の視線は向けられている。部屋の内から外を覗き、誰かを待ち構えているゆみ子。誰を待ち構えているのか。床の軋みと鈴の音が

画面外から聞こえる。床の軋みと鈴の音が連動しているため、廊下を渡る人物は画面内に映ってはいないが、まぎれもなく郁夫だと思われる。ドアが開く。郁夫が顔を出す。やはりあの鈴の音の主は郁夫であった。

3 ふり向いて、じっと見つめる

郁夫の死後、アパートの一室でゆみ子は物寂しげに形見の鈴を鳴らしている。ゆみ子にとってこの鈴の音は聞こえてくるものではなく鳴らすものとなってしまった。能登に移り住み、生活が落ちついた頃、ゆみ子は尼崎を再訪し、馴染みの通り、行きつけの喫茶店、郁夫の職場、以前住んでいたアパートをめぐる。アパートの階段を上り、二階の廊下に足を踏み入れたとき、ゆみ子は何かを察知する。

アパート二階の廊下。ゆみ子は廊下にそって画面の奥へとまっすぐに歩いて以前住んでいた部屋の前で立ち止まる。そして身体をドアの方へ向ける。その様子がローアングルのロングショットで画面手前から捉えられる。続いてゆみ子の横顔を捉えたミディアムショットに画面が切り変わる。ゆみ子はドアの方を見つめる。数秒間ほど見つめたあと顔を少し画面右下に向ける。その後両目が確認できるくらい肩越しにふり向き、顔を画

面手前へ向けてじっと見つめる。それが数十秒続いてこのシーンは終わる。このシーンのショットはすべて固定ショットで捉えられていて、音響はというとゆみ子は一言も声を出すことはなく、ゆみ子が歩を進めるたびごとに床のきしむ音が聞こえる、あとは終始BGMが鳴っていた。

このシーン（「廊下のシーン」と呼ぶ）のラストショットでゆみ子は画面手前をじっと見つめていたが、視線の先へショットが切り返されはしない。ゆみ子は何を見つめていたのだろうか。「廊下のシーン」でゆみ子はある動作をしていた。それは、ふり向くことだ。ゆみ子はこの映画のなかでことあるごとにふり向く。この動作には音が係る。ゆみ子は何かの音を聞くとその音のする方へ即座にふり向く、より正確に述べるなら、顔が向いている方向とは別の方向から音が聞こえてくるとすぐさまゆみ子はふり返ってその音のした方へ顔を向ける。音はゆみ子を捉えた画面内で聞こえてくることもあれば画面外から聞こえてくることもある。たとえば映画冒頭、手鏡に視線を落としていた幼いゆみ子の後方で自転車ベルの音がするとゆみ子は後ろにふり向く、尼崎のアパートでゆみ子の後方でおじいさんの笑い声と手を叩く音がするとゆみ子は後ろへふり向く、尼崎を再訪したとき通りを歩くゆみ子の後方で自転車ベルの音がするとゆみ子は後ろへふり向く。

「廊下のシーン」でもゆみ子はふり向いていて画面手前に視線を投げかけている。ふり向いているため画面外で何かの音がしているはずなのだが、ゆみ子がふり向いた先に音源と呼べるものはないし、そもそもこのシーンでは廊下の軋む音しか聞こえてこなかった。ゆみ子はただふり向いただけだと思われるかもしれない。しかし、そうではない。ゆみ子はこのシーンで流れているBGMのピアノの音に反応してふり向き画面手前へと視線を向けた、とわたしは考える。

廊下手前からゆみ子を捉えたローアングルのロングショットからミディアムショットへと移り変わる瞬間、それと同時にBGMではそれまで鳴ったことのないピアノの金属的な音がターンと響く。ショットが切り変わりゆみ子の横顔というよりはむしろ右耳が捉えられるなかでこの一音は残響する。その後この音は余韻を残して消えてゆきながらゆみ子の顔は徐々にほんの少し右側に向き、続いて両目が確認できるくらい肩越しに振り向いて画面手前をじっと見つめた。

ゆみ子はそれまでのようにぱっとふり向きはしない。まず片目が見えるほどほんの少し右にふり向き、次に両目が見えるほど画面手前へふり向いた。音がどこから聞こえてきたのか耳を澄ませたあと、音のした方へとふり向いたのだ。BGMの一部をなすピアノの金属的な音（「ピアノの音」と呼ぶ）が鳴り響

き、ゆみ子はその音に反応した。それはBGMすなわち物語世界外の音が物語世界内へ流入する瞬間であった。どこからともなく物語世界内で鳴り響く「ピアノの音」。この音の残響はことなく鈴の音の残響に似ていた。

ゆみ子のふり向いた先に「ピアノの音」の音源がある。とはいえ「ピアノの音」はBGMの一部をなしているため、その音源が画面内／外に存在する訳ではない。しかしそう断言することはできない。ラストショットでゆみ子は画面真正面をじっと見つめていた。画面真正面をじっと見つめるという動作は、ふり向くのおなじくこの映画のなかでなんども繰り返される。

この動作がなされると大抵の場合、ゆみ子の視線の先へショットが切り返されるのだが、「廊下のシーン」ではそうならなかった。それでもゆみ子の視線の先を感知することはできる。映画序盤、ゆみ子は郁夫の働く工場を訪れる。工場の入り口は閉じられているが、入り口には格子入りのすりガラスが張られている。作業場の外にいるゆみ子はすりガラス越しに画面真正面をじっと見つめる。その様子が工場内から捉えられたあと、ゆみ子の視線の先へショットが切り返される。郁夫が画面に背を向けて作業している。ゆみ子が見ていることに郁夫は気づいていない。いくらか時間が経ったあと、やっと郁夫はゆみ子の方に視線を投げ返す。その日の夜、ゆみ子は喫茶店のマスターに

愚痴をこぼす。「外からじいーと見てんのに、この人全然氣いつけへんの」。郁夫は言い返す。「んなもん、分かるか」「うちやったらわかりますー」。尼崎を再訪したときにゆみ子はまたこの工場にたち寄る。すりガラス越しに画面真正面をじっと見つめるゆみ子が工場内から捉えられる。続く画面には誰もいない工場のなかが映る。ゆみ子は誰もいない工場のなかをじっと見つめている。じっと見つめていることに気づいてほしい

「この人」はゆみ子の目に映っていないのに。

「廊下のシーン」のラストショットにおいて「ピアノの音」がしたと思われる方向をじっと見つめるときのゆみ子の視線は郁夫のいる／いた方向をじっと見つめていたときの視線と重なる。ゆみ子にとって「ピアノの音」は何かの音というよりは誰かが鳴らした音である。ゆみ子の視線の先には郁夫のような存在がいるのかもしれない。形見の鈴の音と「ピアノの音」は決して同じではないため、郁夫ではなくあくまでも郁夫のような存在である。形見の鈴の音にどことなく似た音にゆみ子が反応すること、画面内／外にたち現れる郁夫のような存在をこれから〈郁夫〉と表記する。ゆみ子のふり向いた先には〈郁夫〉がいる。もちろんゆみ子の目に〈郁夫〉が映る訳ではない。〈郁夫〉という存在はすべからず音で構成されているからだ。

4 能登の〈郁夫〉

尼崎を再訪したあとゆみ子は能登に戻る。家族全員で冬支度を初めたころ、ゆみ子の家の近くに〈郁夫〉がどこからともなく忍び寄る。

真っ黒な画面。何かが移動する音と自転車のベルのような音が聞こえる。そして早朝の青白い一筋の光が兩戸の隙間から真っ暗な部屋の中に射し込まれる。ゆみ子はすっと布団から起き上がり、兩戸を開け、じっと外を眺める。兩戸から見える風景にさきほどの音の音源となりえるものはない。見あたらない。

このシーン（「朝のシーン」と呼ぶ）は映画冒頭のシーンの反復である。幼いゆみ子の後方を自転車に乗った少年の郁夫が走る。ちょうどゆみ子の後方を通る瞬間、郁夫は自転車のベルの音を鳴らす。すぐさまゆみ子は後ろをふり向く。ベルの音が鳴り響き、その音に反応したゆみ子が後方に目をやる。この一連の流れが「朝のシーン」で繰り返されていて、このシーンで鳴るベルの音は郁夫少年の鳴らしたベルに似ていた。画面内にこの音の音源を視認することはできないが、それでも、ベルの音に反応したゆみ子は兩戸の外をじっと見つめていた。能登の家の外に〈郁夫〉がいる。気になることがある。ベルの音が「真っ黒な画面のときに鳴ったのか」それとも「真っ暗な画面

のときに鳴ったのか」まるで判断がつかないということだ。

真っ黒な画面と真っ暗な画面はどちらも画面上は黒くつぶれている。真っ黒な画面つまり画面全体がただただ黒つぶれしているのにも見えなくなった画面は暗いのではなく黒い。画面の黒さは朝から夜になるといった物語世界内の現象とは無関係である。たとえば陽光降り注ぐ明るい室内を捉えた画面においてブラックアウトが生じると、その室内の明るさとは無関係に画面は黒くつぶれてゆく。対して真っ暗な画面は物語世界内にある対象や現象の暗さに係る。画面全体が夜闇に覆われていてなにも見えない場合、その画面は黒いのではなく暗い。暗いからこそ物語世界内の光が射し込みさえすれば画面の闇は取り払われて何かが画面内に見えるかもしれない、暗い部屋に朝日が射し込むとその部屋のなかが明るくなるように。

「朝のシーン」では画面の黒つぶれが真っ黒から真っ暗へ移り変わる。暗転後の真っ黒な画面でベルの音が鳴る。その後兩戸から青白い一筋の光が暗い部屋に射し込む。この瞬間それまでの画面全体には部屋を覆う闇が映っていたことが判明すると同時に、真っ黒な画面だと認識していたときにベルの音がしたということは、すでにその画面には闇が映っていたことが判明する。しかしその闇はいつ黒から変わったのかその瞬間を見て取ることはできない。その変容を見て取ることができないがゆえ

に画面の黒つぶれにおいて黒と闇が融解していたと考えられる。このような暗いとも黒いともいえないあるいは黒いとも暗いともいえる画面の黒つぶれを「暗黒」と呼ぶことにする。真っ黒な画面のままベルの音が鳴ったと書いたが、正確には、画面に「暗黒」が映っている状態でベルの音が鳴ったのだ。

このベルの音はどこで鳴っているのだろうか。この音が鳴ったあと、ゆみ子は兩戸を開けてその外を見ていたためこの音は画面外で鳴っていたと思われる。ベルの音は画面外で鳴ったのだ。ただしそれ以前にこの音は「暗黒」で鳴っていた。「暗黒」という画面内／外ともいえず物語世界内／外ともいえない領域で鳴り響いたこの音はこの領域から流れこんで物語世界に届いた。この流入と同時に「郁夫」は「暗黒」から能登へと移動していた。

5 「郁夫」の葬儀

「暗黒」から能登に「郁夫」が移動した日を境に、ゆみ子は次第にみずから鈴の音を鳴らし始める。

ある日の晩のこと、ゆみ子は家具の引き出しから形見の鈴を取り出し、物寂しそうに手のひらで鈴の音を鳴らしていた。鈴をぎゅっと握りしめる両手がクローヌアップされたあとぼーっ

と家具の前にたたずむゆみ子が映る。たたずむのもつかの間、画面外で戸が開かれる音がするとゆみ子は急いでこたつに戻る。戻る瞬間、ちりんと音がする。ゆみ子の手のなかには鈴が握られている。画面は居間を捉える。こたつ板の上で鈴を両手で握りしめているゆみ子。民雄が酔っぱらいながら帰ってくる。会話を交わしながら、民雄はこたつに足をいれて板に頭を乗っけるように倒れ込む。ゆみ子がいる方とは逆に顔を向けて民雄は目を閉じる。ゆみ子は視線を下げると同時に両手をこたつ板から離す。ちりん。姿勢そのまま民雄は目を開ける。「それ、なんや」「え……」「いま隠したもんや」「別に隠してへんがな、古い自転車、鈴だけ取ってしまおとおもて」。ゆみ子は自転車の鍵に結び付けられた鈴を取り外そうとしていた。

このシーンではなんども鈴の音が聞こえる。鈴はゆみ子の両手に覆い隠されている。手が動くと同時にその音が聞こえてくるが、画面内にこの鈴を視認することはできない。それでもゆみ子の手のなかには鈴があることを観客は知っているため、漠然とゆみ子のいる方から鳴っていると認識するのではなく、ゆみ子のぎゅっと握られた手のなかから鳴っていると認識する。対して鈴の存在を民雄は知らない。この鈴の音は観客にとって音源が確かなものだが、民雄にとってはそうではない。鈴の音が鳴ると民雄はそれまで閉じていた目をぱっと目を開いて「それ、

なんや」という。ぱっと目を開く反応から民雄の耳に音が届いたようで「それ」とは鈴の音の音源を指していると思われる。目を閉じていてなにも見えていない真っ暗な状態で突然どこからともなく何かの音が民雄の耳に届いたのだった。このシーンが終わると映画は終盤にさし掛かる。そこでゆみ子は〈郁夫〉といっしょに鈴の音を鳴らす。

ゆみ子はバス停近くの掘っ立て小屋にたった一人ぼつんと座っている。すると、鈴の音が聞こえてくる。その音は形見の鈴の音に似ている。ゆみ子は小屋から出て画面真正面をじっと見つめる。葬列が移動する様がロングショットで切り返される。

棺が運ばれている。山道らしきところを葬列が移動するシーンを挟み、そして、暗い空と暗い海を背景に葬列がゆっくりと移動する様が、水平線が見えるくらいの極端なロングショットで映る。ゆみ子は葬列のあとにゆっくりとついてゆく。このシーンの間中（「葬列のシーン」と呼ぶ）、鈴の音は途切れることなくずっと鳴り響いている。

この葬列が誰の葬儀なのかはなにもわからない。葬列の方から鈴の音が聞こえてくる。葬列者はなにも一言葉を口にしない。ただただ鈴の音を鳴らしながらひたすらゆっくり移動している。ロングショットで捉えられているし喪服を着ているため、葬列者は画面上においてだれもひとしく黒くつぶれていて一人

一人の姿形を識別することはできない。画面上黒くつぶれた集団から鈴の音が聞こえてくる。ゆみ子はその音に反応する。ここでは音のする方へふり向いてじっと見つめるだけではない。

ゆみ子は葬列についてゆく。ゆみ子は〈郁夫〉がいると思われる方へ向かってゆく。葬列がゆっくりと移動するなか、ゆみ子は少し遅れてそのあとを追う。ゆみ子もまた葬列者と同じく画面上では黒くつぶれた一人であり喪服を着ているのに等しい。少し遅れてついて行っているとはいえ画面の映像において黒くつぶれたゆみ子はまぎれもなく葬列者の一員であり、またそのとき、ゆみ子は葬列者とおなじくなにつ言葉をお口にしない。

ゆみ子はこの一連のシーンで鳴り響いている鈴の音源を持っていないのだが、しかしこの極端なまでのロングショットにおいて葬列者の一員と化して移動しているため鈴の音の音源は、画面上、ゆみ子にもある。鈴を持っていないゆみ子が鈴の音を鳴らす。ゆみ子という黒つぶれに鈴がひそむ。「黒つぶれに鈴がひそむ」とはいえ、この黒つぶれは暗闇ではない。〈暗黒〉である。もちろん部屋が「黒くかつ暗い」ようにゆみ子は「黒くかつ暗く」あることはできないが、しかしゆみ子の「黒」は画面上の黒つぶれにありかつ「暗」はまさに喪服の黒にある。ゆみ子は葬列という〈暗黒〉の一部として誰かの葬儀に参列する。その一部には棺も含まれている。棺のなかに誰が入っているか、

何が副葬品として入っているのかはまるでわからない。しかし棺もまた〈暗黒〉の一部であるためその黒つぶれからも鈴の音が聞こえる。棺の黒つぶれに〈郁夫〉が受肉する。〈郁夫〉の葬儀にゆみ子は参列する。ゆみ子が鳴らす鈴、それは弔鐘でもある。波打ち際で棺が焼かれる。炎が燃え上がり、黒い煙が立ち込める。海辺を暗くし、画面を黒くする煙。〈暗黒〉があたりを少しずつ侵食するように〈郁夫〉は野辺に送られる。

ゆみ子と棺が〈暗黒〉の一部として動くことに連動して鈴の音が鳴った。ゆみ子と〈郁夫〉がいっしょに歩いているようだ。尼崎にある行きつけの喫茶店に寄ったあと、ゆみ子と郁夫は自転車に二人乗りして帰っていた。このとき鈴の音は、この映画では例外的に郁夫とゆみ子がいっしょに移動することで鳴っていた。「一人で海の上におったら、沖の方にきれいな光が見えるんや」と民雄は「海」へと誘う「きれいな光」のことを語っていた。「海」に「きれいな光」が輝いているのかはわからないが、ゆみ子は「一人」で海の近くを歩いてゆく。しかし鈴の音を鳴らしながら歩いているときのゆみ子はすでに「一人」ではない。〈郁夫〉といっしょにいる。二人でいっしょにいるのならゆみ子が「きれいな光」に誘われることはないだろう。そしてゆみ子は波打ち際までたどり着く。画面に葬列の姿はすでない。棺が焼かれている。葬儀が終わる。ゆみ子は「一人」

になってしまふ。それもつかの間、すぐにゆみ子を民雄が車で迎えに来る。〈郁夫〉の葬儀が終わってもゆみ子のそばには誰かがいる。

6 親と子

〈郁夫〉の葬儀が終わると、目が変わる。それまで荒れ模様だった天気が一変する。快晴。ゆみ子と義理の父親は縁側で会話する。「ええ陽気になりましたねえ」「ええ陽気になったなあ」。平穏なシーンなのだが、どうにも不穏さがある。勇一の声が画面外から聞こえてくるからだ。この前のシーンで民雄と友子に見守られながら勇一は自転車に乗る練習をしていた。勇一の自転車は買ってもらったばかりで、以前、能登の市場で勇一が興味を示したものだ。血筋なのだろうか。勇一の気に入った自転車は緑色で、父、郁夫が乗っていた自転車と同じ色であった。好みが似ていると断定することはできないが、郁夫と勇一の行動は似ている。能登に越してきてまもない頃、勇一は友子といっしょに暗いトンネルのなかをどこにも「ふり返」ることなく、陽光射し込む出口にむかって「まっすぐ」に走り抜けていた。映画冒頭で電車と競争するかのよう、どこにも「ふり返」ることなく「まっすぐ」に郁夫は自転車を前かがみになっ

て走らせていた。勇一の前方を陽光が照らし、郁夫の前方を電車のライトが照らす、あたかも前方の「きれいな光」に誘われるように二人は全速力で駆け抜けていた。子は親に似るというのであれば、勇一はいつか郁夫のようにゆみ子のもとからいなくなってしまうのかもしれない、いつか「一人」になってしまったとき「海」に誘われてしまうのかもしれない。だが、心配はいらない。勇一はこの映画のなかでいつも誰かに見守られている。家のなかでは「おじいちゃん」といっしょにいるし、外に出て遊ぶときは「おねえちゃん」といっしょにいる。それでも勇一の「いつか」のことが心配になる。

ラストシーン。能登の家周辺が俯瞰で映る。続いて能登の家の薄暗い一室が映り、そして、だんだんと暗転しエンド・クレジットが流れ始める。ラストシーンが始まると「廊下のシーン」で流れたBGM（「ピアノのBGM」と呼ぶ）が聞こえてくる。このBGMはこの映画のなかで三回流れる。毎回流れ終わると必ず、舞台となる場所が移り変わり、BGMが流れているときに画面内で動いていた人物はどこか別の場所へ移動する。尼崎から能登へ舞台が移り変わる一回目、尼崎の工場やアパートから能登の家へ舞台が移り変わる二回目、どちらも画面内ではゆみ子が動いていた。三回目が流れるとき、画面が俯瞰で捉えられているため、画面内で動く人物を視認することは困難だ

が、しかし「ピアノのBGM」とともに補助輪つきの自転車の動く音が聞こえる。勇一が動く。補助輪つきの自転車では勇一はどこへ行くのか。三回目の「ピアノのBGM」が鳴り止むとき、それはこの映画のエンド・クレジットが流れ終わるときである。そのあとこの映画は幕を閉じてしまふし、勇一が移動するであろう「どこか」の映像は画面に映らない。しかし、そうではない。映画はまだ終わっていない。物語世界がまだ残存している。エンド・クレジットが流れている最中に「ピアノの音」すなわち〈郁夫〉の「生きている合図」が聞こえてくるからだ。この音に反応する人物は当然、映ってはいない。映っているのは黒い画面を背景にしたエンド・クレジットだけだ。そのため「ピアノの音」はBGMの一部として物語世界で鳴っているにすぎないと思われるだろう。そうではない。エンド・クレジットが流れ始める直前、薄暗い部屋を映した画面はぱっと切り変わるのではなく、だんだんと暗転しながら真っ黒な画面に切り変わった。窓から射し込む陽光が遮られて薄暗い部屋がさらに暗くなるように、部屋の暗さと画面の黒さは暗転にともない画面上においてひとしく黒くつぶれ、ついには画面全体が〈暗黒〉となる。〈暗黒〉が映った状態で「ピアノの音」が響き渡り、勇一は能登から「どこか」へ移動する最中に〈暗黒〉に足を踏み入れる。

〈暗黒〉。ここではなにも見えない。あたりにはなにも見あたらない。トンネルは暗かったけれど、出口があった、陽光が射し込んでいた、勇一は友子といっしょに光射す方へ駆けていた。ここにトンネルはない、出口はない、陽光はない、「おねえちゃん」はいない。〈暗黒〉で「一人」きり。勇一の足はすぐむだろう。すると、あの音が鳴り響く。おそらく勇一は音のした方にふり向く。あの音を「母」ゆずりの耳が捉える、〈郁夫〉の「生きている合図」ではなく「ピアノの音」として、誰かの音ではなく何かの音として——「忘れ形見やなあ、いくつんときやった、父親が死んだのは」「三ヶ月のときでした」「ほんなら、顔も覚えてらんなあ、そのほうがええかもな、そのほうがええかもしれんな。おそらく勇一は音のした方をじっと見つめはしない。「息子」は気がつかない、〈暗黒〉に「父ではなく父のような存在」がいることを。それでも何かの音がした方へ自転車のペダルを踏みこむだろう、次第に前かがみになり、サドルから腰が浮いてゆきながら。もはや「一人」ではない、歩みを止めることも彷徨うこともない、何かが、誰かが、一瞬ではあれ、行先を照らしたのだから。〈暗黒〉に果てはない、いくら走ろうと「どこか」へ走り抜けることはできない、しかしあの音が〈暗黒〉を突き抜ける、そして、我が子の帰りを「どこか」で待つ「母」の耳へ届く。ふり向いて、じっと見つめ、

を、「あの人」の「忘れ形見」が帰ってくることを。

「母」は見出す、〈郁夫〉の「生きている合図」を、あるいは、「ピアノの音」の残響とともに補助輪の音が聞こえてくること

註

(1) 郁夫、ゆみ子、民雄といった登場人物の名前はこの映画を見ている限り、イクオ、ユシロ、タシオとして認識できよう。イクオ、タシオといった語感の似ている語が文面で頻出すると煩雑になりかねないのでこの文章では Blue-ray メーラーの「キヤス」の項目を参考にして漢字表記とする。なおこの文章で考察の対象とされる『幻の光』は Blue-ray 版（バンダイナムコエンターテインメント）である。

(2) ゆみ子の視線の先に注目する論考はリムット水田莞著『原子の光』(Lippit, Akira M. *Atomic light (shadow optics)*. Minneapolis, Minn. London: University of Minnesota, 2005. Print) の『幻の光』論がある。「廊下のシーン」にかんじて次のような描写と考察がなされている。“In the hallway of the apartment she once shared with Ikuo, Yumiko walks away from the camera, toward a hazy light cast by a semipaque window. As she reaches the entrance to her apartment, she stops and turns. She is framed in a low-angle long shot. A cut moves the camera closer and frames her in a medium shot. Slowly Yumiko turns her head toward the right and, for a brief

instant, stares into the camera, which seems to have taken the place of some absent figure. An arrest momentary and photographic, lost in the resumption of time. Ikuo is in the camera, is himself the camera. An unseen energy. Slowly Yumiko pulls away from the eyeline match, breaking the phantasmatic contact with the empty figure there. Her gesture is transposed from an apparent perception (of a phantom figure located at the point of camera) to a contemplation. There and not there, in an instant. A flash.” (Ibid. p. 138.) の一節には“An unseen energy”など「原子の光」全体を貫く鍵概念が出てくる。この注釈ではその概念が用いられる是非は問題にしない。ゆみ子の動きと「カメラ」のポジションに力点が置かれた描写がなされている。ゆみ子は「カメラ」に位置づけられた幻の人物」とどうやらほんの一瞬アイラインを結ぶように、その人物とは「郁夫」だと書かれている。しかしどのようにして郁夫がカメラに位置づけられているのか説明がなされていない。また「郁夫はカメラのなかにいて、郁夫自身はカメラである」という言明がなされているものの、なぜ「カメラ」の

なかに郁夫がいるのか、なぜ郁夫自身が「カメラ」なのかといった説明はなにも書かれていない。そのため引用した一節を読む限りゆみ子の視線の先には「カメラ」しかないと思うほかな

い。ゆみ子の視線の先にあるものをより明らかに感知するには、引用した一節の描写において看過されているものが鍵となる。それはゆみ子の動きと音の係わり合いである。

(しもやまだ しゅうへい／博士後期課程)